

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 6 日現在

機関番号：10102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2015

課題番号：26770168

研究課題名(和文) 動詞の交替現象に課せられる制約の理論的・実証的研究

研究課題名(英文) A Theoretical and Empirical Study of Constraints on Verb's Argument Structure Alternations

研究代表者

梶本 顕士 (SUGIMOTO, Kenji)

北海道教育大学・教育学部・講師

研究者番号：90712274

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：生成文法極小主義プログラムの枠組みの下では、constructionalist approachとtheta system approachの2つの主題理論が提唱されている。本研究では、constructionalist approachが項交替に伴う過剰生成の問題を解決できることを明らかにした。また動詞の自動詞形や他動詞形などの交替形がどのような構造を持つのかを動詞句削除に課せられる統語的同一性の観点から明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Within the framework of the Minimalist Program, there are two thematic theories: the constructionalist approach and the theta system approach. My research has revealed that the constructionalist approach can solve the problem with overgeneration of argument structure alternation. I have also shown what structure intransitive and causative alternants of verbs have in terms of syntactic identity condition on verb phrase ellipsis.

研究分野：人文学

キーワード：主題理論 項交替 軽動詞 主要部移動 動詞句削除

1. 研究開始当初の背景

主題理論は、動詞の項がどのように統語的に具現化されるのかを決定する理論である。近年の生成文法理論の下では、動詞の項の統語的具現化を決定する理論は2つのアプローチに大別される。第一は、従来語彙情報と考えられてきた主題役の情報を統語構造から派生させる constructionalist approach である (Krazter (1996), Folli and Harley (2005, 2006) 等)。第二は、動詞に内在する2つの2値的な形式素性の観点から派生的に主題役を定義する theta system approach である (Reinhart (2000, 2002), Marelj (2004) 等)。両アプローチは広範囲にわたる言語現象に有意義な説明を与えるが、移動様態動作主動詞 (jump, run, stroll, walk 等々) の使役の他動詞への交替において過剰生成の問題を生じさせる。従来このような問題は、各語彙の特異性として扱われ、何の説明もなされてこなかった。しかし本研究の予備調査から、使役化を許さない動詞 (e.g. stroll, stomp, tiptoe 等々) には、ある一定の意味的パターンがあることが分かった。つまりそのような動詞は、基本的な移動様態 (walk) にある何らかの様態 (stroll の場合は in a slow way) が追加されている。このような状況において同様の問題が生じる可能性のある他の動詞類 (心理動詞や使役動詞等) の交替について、その可否を決定している要因をさらに精査することで一般化を導き、theta system approach と constructionalist approach のどちらのアプローチの下で説明することがより妥当であるのか、または新たなアプローチを提唱する必要があるのか検討することには価値があると考え、本研究を着想するに至った。

2. 研究の目的

本研究は、(i) 動詞の統語的具現化に関する最新の2つのアプローチの批判的検討を通して、過剰生成の問題が生じる領域を特定し、(ii) 動詞の交替の可否を決定する特性

を明らかにし、(iii) その特性と整合する方のアプローチを修正するまたは整合しない場合は新たな主題理論を構築することによって、言語理論の深化と発展に寄与することを目的とする。

3. 研究の方法

英語の移動様態動詞、心理動詞、使役動詞を主要な研究対象とし、それぞれの動詞が示す交替が両アプローチの下でどのように説明されているのか整理する。次にそれぞれの動詞がどの交替を示さないのか把握し、過剰生成の問題が生じる領域を特定する。またこのアプローチがどの程度までこの差に原理的な説明を与えられるのか検討する。最後に、動詞とそれが生起可能・不可能な統語構造を区別する特性が何であるのかを明らかにし、その特性がどちらのアプローチと整合するのか考慮し、どちらかのアプローチを主軸に修正していくのか、または新たな統一のアプローチを提案するのか検討する。

4. 研究成果

(1) Theta System Approach を仮定した場合、移動様態動作主動詞の使役化において過剰生成の問題が生じることが分かった。

- a. John walked home.
- b. Mary walked John home.
- c. John strolled home.
- d. #Mary strolled John home.

移動様態動作主動詞は(a)で示すような自動詞構文に現れるが、(b)で示すような使役の他動詞構文に現れることもできる。この交替に対して、Theta System Approach では(a)に使役者項を加える語彙的操作が適用され、(b)を派生させる。しかしこの操作は、同一の意味タイプの動詞である(c)にも適用され、容認不可能な(d)を派生させてしまうため、過剰生成の問題が生じる。

(2) stroll のような使役化を許さない動詞は、

基本的な移動様態 (walk) にある何らかの様態が追加されるという一定の意味的パターンがあることが分かった。

- a. walk + in a slow way: amble, slouch, stroll
- b. walk + with heavy steps: clump, plod, slog
- c. walk + with quick steps: mince, pad, stride
- d. walk + in an unsteady way: stagger, toddle,

(3)(2) の一般化はConstructionalist Approach と整合することが分かった。具体的には第一に、使役化のメカニズムは機能投射の有無から派生することを示した。語彙範疇Vと、動作主項を導入する機能投射 v_{do} と使役者項を導入する v_{cause} を仮定し、Vと v_{do} が併合すると自動詞形が派生し、さらにその構造と v_{cause} が併合することで、使役形が派生する。第二に過剰生成の問題は、追加の様態が v_{do} へ編入 (e.g. Harley (1995)) されると仮定することで、主要部移動に課せられる意味的制約の帰結として回避できることを示した。

(4) 自他交替が v_{do} , v_{cause} 等の軽動詞の種類とその可能な組み合わせから派生されることが別の動詞類からも支持されることを示した。第一に下記で示される心理動詞 (anger, bother, worry等々) の3つの交替形を分析した。

- a. John worried about Mary's poor health.
- b. John was worried about Mary's poor health.
- c. Mary's poor health worried John.

自動詞形 (a) と受動形 (b) は、経験者項 (John) と感情の対象項 (Mary's poor health) が具現化するため、同一の動詞句構造 (d) を持ち、使役形 (c) は、(d) の動詞句を軽動詞 v_{cause} に埋め込み、その指定部に原因項 (Mary's poor health) を取る構造 (e) であると提案した。

- d. [_{VP} John $v_{stative}$ [_{VP} worry about Mary's poor health]]
- e. [_{VP} Mary's poor health [_{V'} v_{cause} [_{VP} John $v_{stative}$ [_{VP} worry \emptyset]]]]

これらの構造がMerchant (2013) の動詞句削

除に課せられる統語的同一性の観点から支持されることを示した。この成果は、日本英語学会第32回大会において研究発表を行い、論文として発表した。また第二に、下記で示される受益者交替を示す動詞 (bake, cook, make等々) の3つの交替形を分析した。

- a. Mary made a cake.
- b. Mary made a cake for John.
- c. Mary made John a cake.

これらの交替についても軽動詞 $v_{beneficiary}$, v_{cause} を仮定し、その構造が動詞句削除に課せられる統語的同一性の観点から支持されることを示した。以上、心理動詞と受益者を選択する動詞についても、これらの交替のメカニズムは軽動詞 $v_{stative}$, $v_{beneficiary}$, v_{do} , v_{cause} の組み合わせから説明できることを明らかにした。この成果は、論文として発表した。

(5)(3) の研究の続きとして移動様態動作主動詞の交替のメカニズムが動詞句削除に課せられる統語的同一性の観点からも支持されることを示した。さらに分析の帰結として、使役形の主語に課せられる動作主性と使役文に含まれる2つの下位事象 (使役行為と動作行為) の同時性も説明できることを示した。この成果は図書として発表した。

以上が主な研究成果であるが、本研究の大きな意義は、移動様態動作主動詞だけでなく、心理動詞、受益者を選択する動詞など、広範囲にわたる動詞類において、その交替を過剰生成の問題を生じさせることなく、統一的に分析できることを示したことである。しかし、このメカニズムを追求すると、異なる交替に対して異なる軽動詞を仮定しなければならないため、今後はさらなる他の動詞類の交替を調査するとともに、提案される軽動詞に対して統語的・意味的観点からその必要性を批判的に検討し、統合・還元することを目指す予定である。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

NAKAMURA Taichi and Kenji Sugimoto,
“Argument Structure Alternations and
Verb Phrase Ellipsis: Two Case
Studies,” *Explorations in English
Linguistics*, 査読有、第29号、2015、
63-83.

SUGIMOTO Kenji and Taichi Nakamura,
“An Argument Structure Alternation of
Psych Verbs under VP-Deletion,” *JELS*,
査読無、第32号2015、132-138.

[学会発表](計1件)

梶本顕士、中村太一、「VP 削除からみた
心理動詞の項交替」、日本英語学会第32
回大会、2014年11月8日、学習院大学

[図書](計1件)

- 梶本顕士、「勧誘行為交替の主要部移動分
析」、査読有、『言語学の現在を知る26考』
(菊地朗他編、研究社) 査読有、2016、
320(230-240)。

6. 研究組織

(1)研究代表者

梶本 顕士 (SUGIMOTO KENJI)
北海道教育大学・教育学部・講師
研究者番号：90712274